ぶらり「愛・地球博」一足お先に

「ペットボトル持込禁止」「弁当も手作り以外はだめ」「入場者が予想を下回る」「だけど人気パビリオンには大行列」……。そんなマイナスイメージばかりが先行している愛・地球博（愛知万博）。内閣府の調べでは国民の半分は「万博に行ってみたい」と思っているそうだが、周囲からは、「万博ってどうなの?」という声も少なくない。うーん、だけど気になる愛・地球博。中大でも、行ったという人はまだ少ないはず。4月11日一足おさきに出かけた記者の万博レポート、ハウ・ツー・エンジョイ編――。

学生記者　阿部恭子（総合政策学部4年）

万博までの足、これがおトク

そもそも万博に行くためにはけっこうお金がかかる。入場券、それから交通費の出費がかさむ。記者のような貧乏学生には新幹線に乗る経済的な余裕はない。交通費を少しでも抑えたい旅には、「青春18きっぷ」がおすすめだ。春休み・夏休みなどの学生長期休暇中のみの限定発売だが、1枚あたり2300円（ただし5枚綴りで購入）で普通列車が自由に乗り降りできる。夜行列車「ムーンライトながら」で東京を夜の零時時近くに出発すると、翌朝には名古屋に着くのでたいへんお得な切符だ。

また名古屋・東京間の夜行バスも各社様々なサービスを揃えており、これらを利用することで交通費を相当抑えることができるはず。

どこも、人・ひと・ヒトの大渋滞

万博の会場は名古屋市内ではない。地下鉄とリニア・モーターカー、「リニモ」を乗り継いで1時間弱、長久手という郊外が会場だ。記者の行った当日は小雨が降り、寒々しく、平日ということもあって混雑はしないだろうと楽観的に構えていたら大間違い。あまりの混雑で乗客は駅で入場待ちをしていた。1時間ほどしてなんとか万博会場へやってきたものの、こんどは開門を待つ群集に圧倒される。門の端から端まで何百人もの行列だ。いざ門が開けられると、そのカタマリが一斉に目的地へわれ先にと猛ダッシュ。群衆心理というやつで、もちろん、負けじと疾走した私である。

「走るのはやめましょう～！」と警備員の声が響くが、みなお構いなしだ。目的のパビリオンへ、あるいは整理券を獲得するために。午後になると混雑はさらにひどくなった。人気パビリオンでは1―2時間待ちも珍しくない。

人気は、トヨタ館、日立館、三井・東芝館、またマンモスの展示などだ。しかし、この混雑では、こういった人気パビリオンの全てを1日で制覇しようなんて無謀である。インターネットで万博公式ページから1カ月前の事前予約も可能だが、枠が限られており、1カ月後の予約分はすでに終了したパビリオンが多い。効率よく見学したいなら、長時間並ぶ覚悟や事前にホームページなどで整理券配布などの時間を調べておく計画性が必要だろう。

人気は企業パビリオン 3DCG、アニメCG体験も

各企業が最新の技術をこぞって楽しく体験できることで人気のある企業パビリオン。記者が体験したのは、まず「日立グループ館」である。希少動物とのふれあいがテーマで、最新の端末で一人ひとり個別の情報を表示してくれるという「ユビキタス体験」を通してその生態を学べるほか、乗り物に乗り、専用のメガネをかけて3DCG（立体視映像）の世界で

動物の世界にいくことができる。いままでの3Dとはまったく違い、自分がその世界であたかも動物と触れ合っている生の感覚が味わえる。プログラムされた映像ではなく、私の動きに合わせて動物たちが反応してくるのだ。すっかり子供に戻ってはしゃいでしまった。もうひとつご紹介するのは、「三井・東芝館」だ。

「はるか未来、人間のおろかな過ちによって滅びてしまった地球。他の惑星へ移り住んだ地球人の子孫が、地球からの信号を受け取り、母なる宇宙を目指し旅に出る」

という宇宙冒険のアニメーションの登場人物に観客自らがなるというもの。顔を3Dスキャナーで取り込みCG化して、アニメのキャラクターとなる。どんな役柄になるかはできあがったアニメを鑑賞するまでのお楽しみというわけだ。記者は宇宙船のブレーンとなり作戦会議を開くような知的な役に。同行の妹は宇宙船隊長。ところがあまりに顔とアニメーションが合っていないので「なによコレ、ひどいんじゃない」と妹はムクむくれた。なにしろ男の隊長でみなを引っ張るような勇敢さとリリしさ、声も男の低い声だった。まあそれでも、スクリーンに映るキャラクターの勇敢さに、意味もなく誇らしくなったりして大笑い。

なじみのない最新技術を身近で体感できる面白い機会だ。最先端の技術のなかにいることは、子供のころ夢にみたような世界で、別世界だった。

会場を走るシャトルバス

いながらにして異文化体験

万博では日本にいながらにして、様々な国に旅立つことができる。100カ国を越える公式参加国が単体、または共同でパビリオンを持ち、現地の人々がその国ならではの体験を紹介してくれたり、食事も各国の味を楽しむことができる。見所がそれぞれ違うので事前に調べて的を絞らないと、回りきれないで疲れてしまうかもしれない。伝統工芸の美しさや現地の味に舌鼓をうつのもいいが、それでは、どうしても飽きてしまって中だるみしてしまいがちだ。そうならないために、おすすめしたいのはぜひ各国のパビリオンにいる現地の人と会話することだ。すべての展示に解説があるわけではないので、いろいろ質問してみると知識も増え、楽しさも増える。一石二鳥である。話しかけてみるとつたない日本語や英語でなんでも答えてくれた。彼らもずっと黙っていてしゃべりたい欲求がたまっているようなのだ。それにアイスランド、モンゴル、南アフリカ……ふだんなかなか会えない国の人も多い。記者はというと、大好きな北欧の共同パビリオンでマニアックな話を堪能したのだった。

トルコのアイスクリーム屋さん

ナショナル・デーを狙って

また、「万博は毎日が特別な日」という触れこみのとおり、毎日どこかの国のナショナル・デーのお祭り

人があるのも見逃せない。

記者はノルウェーに留学経験があるので、ノルウェーのナショナル・デーを祝う4月11日を狙って行った。あまりメジャーでない国のお祝いの日だからこそ「待ってました！」といわんばかりに、日本に住む数少ないノルウェー人やマニアックな北欧愛好者が集まり、特別ゲストのノルウェー王室のホーコン皇太子に旗を振ったりして、ちょっとしたお祭りである。新たな友人もできたりしてとても有意義だった。万博に行きたいけれど、いつと決めていない人は興味のある国のナショナル・デーを選んで行くのがおすすめ。

スペイン館

考えた—自然の叡智と商業主義

朝からかけまわって、あちこち見学し、小泉首相が「高くてマズい」と評した会場内での食事をとり、またイベントに興じ、大混雑のお土産店で買い物を済ませ……。考えた。

「はて？　わたしの今日したことって〈自然の叡智〉と呼べるのかしら？」

〈自然の叡智〉とは、愛・地球博が掲げるテーマである。人類の進歩はさまざまな技術を驚くほど進化させた。その一方で地球環境は大変な危機にさらされている。叡智とは、「すぐれた知恵」「深く物事の道理に通じる才知」という意味だ。自然に敬意を表し、持続可能な万博を目指すということだろうか。確かに会場は自然にやさしい素材を用いて、なるべく無駄が出ないようなつくりになっているし、会場内の交通も二酸化炭素を排出しないなど最新の技術を用いた環境への配慮がなされている。

混み合うゲート

もっともこういった配慮は時代の流れとして当然で、強調することではないかもしれない。「地球市民村」といった持続可能性を学ぶＮＧＯ／ＮＰＯのパビリオンもあり市民参加型で取り組んでいるが、企業パビリオンに隠れて本来主役になってもよさそうな団体が目立たないのは残念なことである。ずいぶん〈自然の叡智〉から離れてしまったと感じたのは、やたらと高い食事、広い会場内の移動での交通手段の有料化、数え切れないほどのお土産の数々など。ここだけ商業主義反対、と言いたいわけではないけれど。

贅沢に慣れきっている私たち。先端技術にも慣れ、エンターテイメントもそこらじゅうにある、過去最大の入場者数と日本人を巻き込んだ１９７０年大阪万博のような一体感はなく、２００５年万博は、わたしたちにとって、テーマパークの一つといった感覚なのかもしれない

テーマパークだったらなかなか楽しいテーマパークだけど、やっぱり名前のように「愛」され成長してゆく博覧会になってほしい。そうはいっても、記者は「もう一回行こう」なぞと思っているのである。魅せられたところも多いものだから。

万博は9月25日まで続く。キレイとかスゴイとか楽しいだけじゃないモノを見つけてこよう。計画と準備は入念に。